

情報通信審議会 情報通信技術分科会
電波利用環境委員会 CISPR D 作業班(第6回)

議事要旨

- 1 開催日時：令和4年9月6日(火) 10:00~10:45
- 2 開催場所：Web 会議開催 (Cisco Webex)
- 3 出席者（敬称略）

【構成員】塚原主任 (JQA)、野島主任代理 (トヨタ自動車)、久保構成員 (NHK)、永野構成員 (ARIB)、前田 (規) 構成員 (NTT ドコモ)、前田 (幸) 構成員 (アイシン)、水谷構成員 (日野自動車)、三塚構成員 (TELEC)、吉田構成員 (本田技研)

【事務局】総務省：島田電波利用環境専門官、伊藤電波監視官、下谷電磁障害係長、木村官

議事要旨

(1) CISPR SC-D オースティン会議 対処方針(案)について

塚原主任より資料 6-1 に基づき説明が行われた。

次に、WG1 の担当する CISPR 12 について、野島主任代理より資料 6-1-2 及び 6-2-1 に基づき説明が行われ、以下の質疑応答があった。

三塚構成員：検波方式については、CW のように連続波で出ている場合に成り立つものもあるかと思う。パルス波の場合は検波回路を用いた場合、差分が大きくなると思うがそこも検討されているのか。

野島主任代理：点火系については放電系のノイズで Peak と QP の相関は 20dB 程度あるということが前提に立っている。EV 走行状態の場合、純粋に EV のモータだけであれば充電と同じ 6dB が使えるが、車両だと放電系のノイズ源も併せて測定することになり、その場合は 10dB から 13dB 程度の相関が見られる。それぞれ広帯域と狭帯域をミックスで測定せざるをえないため、点火系が支配的になる場合は 20dB、そうでない場合は 13dB、充電では 6dB というふうに適切な形で合理的な運用方法を定めたい。なお、日本は当初からデータ測定に参加している。

続いて、WG1 の担当する CISPR 36 について、吉田構成員より資料 6-1-2 及び 6-2-1 に基づき説明が行われ、以下の質疑応答があった。

三塚構成員：尖頭値検波方式での測定に関しては CISPR11 や CISPR 16-2-3 で新たに FFT を

用いた測定器の使用というのが最近出てきており、最近の測定器はリアルタイムで 30MHz から 1GHz まで測定できるようなタイムドメイン・スキャンを行うことが可能である。今後も測定法については色々な小委員会から意見が出てくると思う。参考までにコメントする。

吉田構成員 : 元々 CISPR 36 では CISPR 16-1-1 が引用されており、タイムドメイン・スキャンは有効である。

最後に、WG2 の担当する CISPR 12 について、前田(幸)構成員より資料 6-2-2 に基づき説明が行われた。

(2) 電波利用環境委員会 報告書(案)について

塚原主任より資料 6-2 に基づき説明が行われた。

(3) CISPR 会議 出席者(案)について

塚原主任より資料 6-3 に基づき説明が行われ、事務局から資料のエディトリアルな修正が行われた。

(4) その他

特段意見なし。

以上